



落

語教室生が二人入って、それぞれ初稽古を終えた。子どもたちの心の中までは読み取れないのだが、そこそこ楽しんでるように見えた。そこで開塾以来つらつらと夢想していた計画をいくつか実行に移すことにした。一つには寄席の出前、もう一つが公開稽古である。

出張寄席については、この欄にも少し前に書いたのだが、知人の口利きもあって、さっそく某デイサービスから依頼が入った。

十一年前に高尾小学校で「にこにこ寄席」を始めたとき、あちこちに営業をしかけ、引受先が一つ、また一つと決まっていたころの心持ちがどうしてもよみがえってくる。昂揚感はもちろんあった。でも、それを押さえつけて心のあらかたを占めていたのは「なんでもこんなことを始めてしまったのだろう」という苦みの方だ。子ども落語に限らない。この気分は身に覚えがある、しかも一度や二度じゃないぞ、と思う。何かを始めるときはよく。前例がないときはほぼ確実に十年どころか、二十年、三十年と懲りずに何度も繰り返している。サイモン&ガーファングルの『サウンド・オブ・サイレンス』が頭の中で流れる。

「Hello darkness my old friend. I've come to talk with you again.」

空き家 27

木幡智恵美

生家の思い出⑭

生家から離れ、知り合いもない地で学生生活を送ることになった。父の事業の方はオイルショックを何とか乗り切ったものの、音響メーカーからは手を引き、また縫製に切り替えていた。夏休みに帰省すると、今でいうエコバッグのような、手軽に使える布製鞆が工場に並んでいる。そして、家はすっかり様変わりをしていった。

玄関を入ると、大きな下駄箱が据えられていて、前は土だったところが応接間になり、その奥の竈があったところが台所になっている。「なかえ」や「おもて」、奥の部屋はそのままだったが、風呂とトイレが奥の部屋の北側にできていた。母屋の北側には、少し離れて風呂が建ち、こでを入れておく小屋や伯母の簡易便所が並んでいた。それらが取り払われ、母屋を北側に少し張り出した形にして台所を広くし、廊下と物置、風呂、トイレを設置していたのだ。使い勝手は良くなったけれども、家の中に入った瞬間に感じた違和感はぬぐえなかった。まず玄関の応接間が、父の見栄に思えたのだ。「オイルショックを乗り切ったぞ、すごいだろ」とでも言っておソファにふんぞり返っているような。

外観だけでなく、中身も変わっていた。祖母が亡くなった後、伯母もいなくなっていた。尼崎の伯父が建てた家に、先に帰された連れ合いが引き取っていたのだ。伯母に会いに行くと、あの癩癩を起こした際の顔つきで寝間着姿のまま現れた。連れ合いは、「夜中に起きて冷蔵庫の物をつまんだりしてな…」と眉を寄せて話す。取り皿に盛られた物以外、絶対に手を付けない伯母だったのに。心の抛り所だった祖母が亡くなり、住み慣れた家を離れ、あまり接したことのない人と過ごすのだ。落ち着かなくなるのは当然だ。伯父にすれば、長男である自分が面倒をみるのが当然だと思っていただろうし、新築の家に連れ合いを住まわせるからには引き取るべきだと考えたのだらう。そんな事情は伯母に通用するはずがない。

家には工場の人たちが常に入出入りし、私の馴染んだ家ではなくなっていた。一年生の夏休みに長逗留して以来、長期の休みに帰省しても、二三日で引き返すようになってしまった。

落語の稽古は公開します、と保護者に伝え、ご近所に案内文書を配って歩いたときも、old friendはぼくのそばにしつかりといた。それと落ちて着かないまま公開稽古初日を迎えた。塾生が来る前から近所のお年寄りたちが入ってこられた。一人か二人来られたら御の字、と思っていたら、七人も来られてあわてて椅子を出したりした。一人でもお客さんが来れば、子どもには簡単に説明して、「大丈夫だ、慣れろ」と励ますつもりだったが、そんな言葉では間尺に合わない。「いつも通りの稽古だから気にするな」など訳の分からぬことを言ってお客さんの前に送り出した。この経緯を理解できない塾生が、抵抗したり、泣き出したりしても仕方がない状況だったが、初めこそ動揺していたものの、繰り返し語るうちにだんだんと落ち着き、拍手や掛け声をもらって調子が上がっていった。お客さんもそれを認めて、さらに拍手をするという願ってもない展開になった。

いつもじゃないけれど、old friendが時々こんな結末を用意してくれていることをぼくは知っている。だから苦くても繰り返してしまうのだろう。そしてこの旨味の持続時間はたいそう短く、じきにおなじみのold friendに戻っていくということもまたよく知っている。

30代フリーター ハマスによるイスラエル急襲は、ロシアや東アジアに向いていた世界の目を一気に中東に引き戻した。中国や北朝鮮に向いていた世界の目をロシアがウクライナ侵略で一気に自らの方へ引き寄せたように。ハマスはロシアの振る舞い方をまねたのではないか。

年金生活者 立山良司という中東問題の専門家は朝日新聞でハマスの動機を次のように推定していた。「敵対するイスラエルと、アラブの盟主を自任するサウジの関係正常化が、パレスチナ問題を無視して進んでいる、とハマスには映ったのだろうか」(10月9日朝刊)

もともとは自分たちと一体だったはずのウクライナと西側諸国の関係の緊密化が自分たちを無視して進んでいるとロシアに映ったのが、侵略を始めた動機のひとつと考えれば、ハマスがロシアをまねたという推察は成り立ち得る。

イスラエルとサウジアラビアの関係正常化の流れは、世界の戦争の「本流」が第2次大戦を最後に、破壊力を競う流血

30代 世界の戦争の「本流」が流血の戦争から無血の戦争に移ったとジイさんは言うが、ウクライナに続く中東でのおびただしい流血はそれを疑わせる。

年金 無血の戦争の「本流」化は流血の戦争の消滅を意味しない。無血の戦争は流血の戦争を必要とする。

軍備が抑止力たり得るためには、それが破壊力を備えていることが実証され、いつでもそれを行使する意思が国家に存在していることが必須の条件となる。軍事力の保有は、破壊のためではなく、抑止のためであり、したがってそれを使わないようにするのがその目的だ、と国家が本気で考え出したとたんに、それは抑止力を失う。

破壊力の実証方法としては実戦に勝るものはない。演習・訓練はそれに遠く及ばない。だから、国家は実戦への衝動を常に内に秘めている。衝動は絶えず出口を求めており、東西冷戦という無血の戦争が続くなかで起きたベトナム戦争や中東戦争といった流血の戦

の戦争から、抑止力を競う無血の戦争に移ったことの(時間差をともなった)反映だ。イスラエル打倒を目指すハマスにとつて、それは無血の敗北を意味する。それを阻むには「本流」に逆らつて大規模な流血を引き起こすことが必要と考えたと推察される。

ロシアにとつても、第2次大戦後の「本流」の転換は不都合になりつつあった。もしウクライナがNATOに加盟すれば、東西冷戦に続いてふたたび無血の戦争で敗北を喫することになる。ウクライナはロシアにとつて「帝国」の服属国に相当し、自らの統治を支えるつかえ棒のひとつだ。それを失うことは、領土を失うに等しい痛手となる。ロシアは「本流」に逆らうことを選んだ。

ハマスはその一部始終に目を凝らしていたはずだ。テロやゲリラだけでは「本流」には逆らえない。国家対国家の戦争に近いレベルの作戦が必要だ。だから、前例のない陸海空からの大規模な攻撃を仕掛けた。

30代 ハマスの急襲はパールハーバー

争は、その噴出と考えることができ

30代 パレスチナ情勢の急転で原油価格が上がり、インフレがさらに進むのではないかと懸念されている。

年金 資本主義の標準状態はデフレであり、インフレは例外状態だ。パンデミックという偶然と、ウクライナ戦争

か、といったコメントがSNSに並んでいた。

年金 奇襲がイスラエルの戦意を高揚させ、大規模な反撃へ向かわせたことは確かだ。ただし、似ているのはそこまでだ。

アメリカが日本を壊滅状態に追い込んで占領し、その後も属国扱いしているような事態が、パレスチナで起きることはあり得ない。太平洋戦争での成功体験に囚われているアメリカは、9・11テロを真珠湾になぞらえ、アフガニスタンとイラクに報復戦争を仕掛けて占領したが、武装勢力による激しい抵抗に遭つて、撤退を余儀なくされた。

それを目の当たりにしてきたイスラエルは、ハマスの掃討だけでなく、ガザ地区の占領にまで踏み込めば、アメリカの二の舞を舞う恐れがあることを承知しているはずだ。占領は国家の建設を希求するパレスチナ人のアイデンティティを大きく棄損することになり、アフガン、イラク以上の泥沼化が予想される。

という経済外の要因が引き起こした現在のインフレをみればそれは歴然としている。

資本主義が剰余価値という、いわば余分な価値を追い求めるシステムである以上、過剰な供給に向かうのは避けられない。それが様々な形の「過剰」を生み出した。歴史を振り返れば、商業資本主義は流通の過剰によって、産業資本主義は生産の過剰によって、ポスト産業資本主義は消費の過剰によって発展を遂げた。

過剰を起動したのは各時代のイノベーションだ。商業資本主義における流通の過剰は、遠隔地貿易というビジネスモデルのイノベーションによって、産業資本主義における生産の過剰は産業革命という科学技術のイノベーションによって、そしてポスト産業資本主義における消費の過剰は、消費のエンターテインメント化という生活のイノベーションによって可能になった。

現在のインフレは、戦争が終われば、おのずと終わるだろう。

ニュース日記 896
中村 礼治

ハマスとイスラエル